



長島昭教授のエッセイに登場する
とげ可憐な「カラタチ」の花(拡大)

(財)福澤記念育林会 「育林友の会」ニュース

第3号 発行日 2002年12月25日
財団法人 福澤記念育林会「育林友の会」
東京都港区三田2-15-45
慶應義塾 管財部 管財課
TEL 03-5427-1532
FAX 03-5427-1533
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~ikurin/>

森の散策

(財)福澤記念育林会
理事長 田中 俊郎



田中俊郎理事長
(慶應義塾常任理事)

2001年5月末から安西祐一郎塾長の下で常任理事を務めておりますが、広報・渉外・国際交流・募金とともに、育林事業も担当させていただいています。2002年5月の総会で前常任理事の長島昭教授から福澤記念育林会の理事長職のバトンタッチを受けました。この間、志木の森での下草狩り、幼稚舎の杜や116年三田会による黒羽町で植林作業、最近の尾鷲・熊野での研修旅行などに参加しました。また、ご寄贈のお申し出を受けた石川県尾口村や美作落合などの山もみせていただきました。仕事だから行くのではなく、私自身の楽しみのために参加させていただいています。

森や育林のお話をうかがっていると、最も意識するのはタイムスケールの違いです。日ごろ、一秒、一分、一時間、一日、一週間、一月、一年、長くてもせいぜい五年ぐらいのスケールでしか物事を考えないのに、育林では世代(英語では30年)単位、50年や100年先を考えるタイムスケールの長さ新鮮な驚きを感じています。

私は、鳥取県米子の生まれですが、父の転勤で3歳で東京にでた後、基本的には東京と横浜に住んできました。その間、国内では、京都、西宮市甲東園、国外では、ロンドン、ボストン、ブライトン(イギリス)、ブリュッセル、フィレンツェにも滞在しました。しかし、とりわけ森や木に関心があったわけではありません。大学時代から野沢や網張などにスキーによくいきましたが、山登りの経験があるわけでもありません。

それでも、森について思い出はいくつかあります。国内では、東京都の多摩湖から山梨県に入った直後の天平山にワラビ狩りに7-8年かよいましたが、体力検定のつもりで行ってました。最初のころ背の高さであった木々が育って、最後には木の下をぬってワラビを探したのを憶えています。

ベルギーでは、ブリュッセル市内南にあるカンプルの森は芝生が広い公園でしたが、さらにその南に続くソワーニュの森はメーテルリンクの『青い鳥』の舞台になったほどのうっそうとした森で、自分だけの秘密のキノコ採取場所をもっている友人がいました。その場所は教えてもらえませんでした。あなただけですよと教えられた(実は皆知っていた)ヒヤシンスの原生地は、暗い森のなかに浮かぶ青白い別世界でした。また、天然の要害として通行不能と思われていたアルデンヌの森を戦車で突き進んで背後から奇襲をかけたのはヒトラーでしたが、そのアルデンヌは今ではイタリアのパルマと並ぶ生ハムやパテの産地としても有名です。フィレンツェ郊外の山でも、秋になるとキノコを探している人々に出会いました。イタリアの松茸ともいわれるポルチーニを探していたのでしょう。

目次：

田中俊郎理事長からのメッセージ	1
三重研修旅行報告	2
今後の計画	3
連載 No 3 森や樹の紹介 「からたち連想」	4

実利的な目的で森に入るひとばかりではありません。ドイツのケルン郊外では日曜日の森の散歩を経験しました。森のなかの路を何時間もただ歩くだけなのですが、教会の帰りか、これから音楽会やオペラに行くのかとも思っばかりの服装の人々も多くいました。真冬の寒い時期だったので、ミンクかなにかのフルレングスのコートで散策を楽しんでいる女性もいたのが印象的でした。

思い起こすまま記憶の糸をたぐり寄せてみましたが、これからは森や木にかかわる楽しい思い出をご一緒に作りたいと思います。それにつけても、会のお世話をしてくださっている海瀬さんや速水さんをはじめとする皆様のご努力は、並大抵のものではありません。深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。

三重の森林と熊野古道を訪ねる旅

11月2日～3日にかけて1泊2日で「**三重の森林と熊野古道を訪ねる旅**」を開催いたしました。

参加者52名はJR尾鷲駅に集合し、小型バスに分乗して土井周平氏から寄贈を受けた尾鷲市九鬼町の山林に向いました。

現地では立派なヒノキ製の看板が、塾旗に覆われて我々を待ち構えてくれていました。今回の旅のメインセミナー「土井山林の引渡し式」を尾鷲ヒノキの林立する森の中で執り行いました。式典では田中理事長から感謝の挨拶、尾鷲市長の祝辞、看板の除幕に続き土井さんご挨拶を頂いた後に参加者全員で記念撮影を終え現地を後にしました。この林も間伐などの手入れをすれば、10年後には素晴らしい森林になるものと思います。後年に再度訪れるのが楽しみです。



尾鷲を後にして隣町「海山町」にある速水さんの大田賀山林に到着、ここは都会から訪れる多くの方々の為に、古くから使われている林業機材の展示室や、セミナーを開催できる施設なども整備されており、林の中で一日を楽しむことができるといえる様に気配りされていました。

森林に囲まれた美味しい空気の中で紅茶を頂いた後、樹下が羊歯に覆われた美しい森林にご案内頂き、育林方法等のご説明を聞きながら林内を散策した後、鑑賞炭を焼く用意を見学させて頂き現地を後にしました。時間の経過を忘れる素晴らしい体験でした。

尾鷲市内のホテル到着後、懇親会を開催、田中理事長、尾鷲市長、長島教授のスピーチを交え、慶応フォレストクラブの森君の乾杯で開宴、今日の体験を話し合うなど楽しい時を過ごしました。中締め挨拶の後各所で語らう人の輪が広がり、また学生達は今夜はシュラフ(寝袋)を持って速水さんの山小屋に泊まる準備?の為に残った食材をバックに詰める等、なかなか終宴しそうでありませんでしたが、明日は熊野古道の馬越峠のトレッキングも控えていたので、深酒することなく床に就きました。



翌朝、東の空が茜色に輝く素晴らしい快晴で、期待に胸を弾ませ起床し登山口に向かいました。熊野古道は石畳の歩道も良く整備され、また周辺の景色も素晴らしく、昔の人たちはどの様な思いでこの道を辿ったのかと想いを馳せながら、気持ちよい汗を流しつつトレッキングを楽しみました。

峠を越して海山町に入ると、古道は速水林業の素晴らしい林に入り見事な絵を見上げ、足下の猪のヌタ場を見、下草の中に咲く可憐な花に目を奪われ、上に下に右左に視線を忙しく巡らせながら下山しました。

この古道は現在「世界遺産」に登録申請中とのことで、静かに仲間だけでトレッキングを楽しめる最後の機会になってしまうのかも?等と考えている内に麓に着いてしまいました。

再びバスに乗り速水林業の大田賀山林を訪れ、速水勉さんから尾鷲の林業にまつわるお話をお伺いしました。環境を見据えた氏の林業に対する想いなどに深く感銘を覚えるとともに、速水林業の森林の素晴らしさの根源の一端を垣間見た思いがしました。

その後、鑑賞炭の釜揚げに立会いご用意頂いた発泡スチロール容器に各自鑑賞炭を数個づつ詰める作業に没頭、「これが大きい」「いやこちらの方が形が良い」などと会話を弾ませながら、子供時代に還りお土産の用意をしました。ちなみに百貨店では鑑賞炭は数千円もするとの事でした。



最後に慶応義塾における「学生参加の育林活動発祥の地」ともいえる「志木の森」を訪れました。今回の参加者の中にはこの森で植樹をされた方も多く、夫々思い出の場所でもありました。

ここでは吉田さん親子(共に慶応志木高校のご出身)から説明を受け、感慨深げに山の中に分け入ったり、木々の合間から「自分の植えた木が何処だろうか」「鳥居元塾長や長島教授の植えた木は！」等と熱心に林内を探索しました。

塾長や長島教授の植えた木は後から実生で生えて来た木に押されて目立たなくなっている事から、あの二本にだけ肥料を施して成長を促しては等とワイワイガヤガヤ楽しく過ごしました。

ここでは株立(一本の株から数本の幹が出ている状態)になった樫の木や椎の木などの手入れなど、学生達に出来る作業が数多く残っており、育林体験のフィールドとして今後とも吉田さんのお世話で活用させて頂くことが出来る素晴らしい場所だと思いました。

いよいよ最後の見学地、伊勢神宮の設営に先立ち造られた瀧原宮を訪れました。かつて台風により境内の杉・桧に大きな被害があったと聞きましたが、さすが歴史のある神社、宮殿に至る参道は立派な古木が立ち並び荘厳な雰囲気醸し出しておりただ感動するばかり。吉田さんのご指導のもと、この神社の古式に則り、敬虔な気持ちで参拝しこの地に別れを告げました。



この旅を通じ、土井周平さん、速水勉さん、速水亨さん、速水紫野さん、吉田勝彦さん、吉田正木さんはじめ多くの方々のお世話になりました。

また多くの会員ならびにご家族やご友人の方々、塾からも田中常任理事はじめ多くの方々に参加を頂き有難うございました。心より感謝申し上げます。

今後の計画

来年度も「楽しく学び、思い出に残る企画」をしたいと検討中です。ご希望やアイデアが有りましたら事務局までご提案を頂きたくお願いいたします。

今のところ次のような提案があります。

- ◇ シンポジュームの開催 (6月頃)
- ◇ 岡山県落合の山林での体験活動 (8月中旬過ぎ)
- ◇ トヨタ自動車の運営する野鳥の楽園「トヨタの森」を訪ねる旅
(ご希望の方にはトヨタの工場見学等もセット)

【連絡先】

慶應義塾管財部 管財課

または

和歌山市西汀丁15-1 マルカ林業株式会社 海瀬亀太郎

FAX : 073-436-1187

E-Mail kaise@1965.jukuin.keio.ac.jp

【お断り】

今回は紙面の都合から

「自然保護にご尽力されている団体紹介」と

「福澤記念育林会の山林紹介」

は掲載できませんでした。次号から復活する予定です。

連載 「からたち連想」

長島 昭 (理工学部教授)

日吉の駅からいちょう並木を上っていく。左側を見るとからたちの垣根がある。以前は記念館前の広場のそばまで延々と植わっていて、毎年、秋になると黄色の実をつけていた。からたちの鋭いとげは接触拒否の意思表示だが、からたちの実はピンポン球くらいで、深い緑の表面にピロードのような淡い微毛があって、手の平に乗せると感触がこころよい。この実は固くて食べられないけれども、黄金色に色づいたものを机上に置くと、美しい色とかすかな香りを楽しむことができる。日吉の垣根で私は立ち止まって、じっと眺める。一度目をそらせて、そして再び目を戻すと、不思議なことに一番きれいな実がひとつ、根元に



落ちているのだ。

こういう不思議な出来事は、近くに他人が居る

ときには決して起こらない。この実は、黄金色を長く楽しもうとして早めに青いまままで採取、いや、拾って帰ると、間もなく表面に汚い茶色のしみが出て、きれいな色にはならない。

このことはカラス瓜の実も同様で、きれいに紅やオレンジ色に発色したものは、お正月くらいまで長く玄関の飾りになるのだが、青いのを持って帰っても、汚い色のままで終わってしまう。



さて、北原白秋の詩に、「からたちの花が咲いたよ。白い白い花が咲いた

よ。」とあるように、からたちは春には真っ白な小さい花をつける。私が幼い頃を過ごした但馬の山奥のうちにも、からたちの垣根があった。果実の樹のなかで、白い花をつけるものには、りんごでも梨でも、特別な情緒がある。しかし、からたちの場合には、あのとげの厳しさと、美しく可憐な花の対比が忘れがたい。

白秋が母のもとで幼い頃を過ごした九州の柳川は、今も素朴な水郷である。駅の近くの渡船場から、さお舟に乗ってゆるゆると行くと、水路のそばの学校の校庭からテニスの音が聞こえてくる。水路は低い位置なので、舟からはテニスコートは見えないものの、その若々しい音には気持ちの浮き立つような、そして奇妙に郷愁を誘うものがある。柳川は全国に聞こえたテニス王国だそうで、昔から長く軟式テニスは優勝を重ねたとか。そう言えば古い話だが、からたちやカラス瓜の有った日吉の丘に、慶応義塾の100周年で今の記念館が建つ以前には、あの場所に軟式テニスのコートが沢山あって、いつもポーンポーンと軟式の音がしていた。

柳川ではもうひとつ面白いことがあった。大学の工学部で熱力学を教える私たち数人で、柳川駅から近い神社に行ってみたら、大きな看板があって、「熱の神様」と書いてあった。みんな自分のことかと喜んで写真を撮ったが、後で考えるとこれは風邪に効く神様のことであった。このようなのんびりした柳川の雰囲気は、最晩年の白秋が郷愁を託した60年前の写真集「水の構図」や、1986年のNHK特集「トンカジョンの出奔」だけでなく、今現在の柳川にも、垣間見ることができる。

今年は私は、からたちの実もカラス瓜の実も無しでお正月を迎える。日吉のからたちは、新館建設で見ると無残に刈り取られ、今は守衛所近くに、細々と実も葉も無い枝が残るだけになってしまった。「からたちも秋はみのるよ。まろいまろい金のたまだよ。」秋が来ても白秋を想うすべもない。日吉の記念館の左にある矢上キャンパスへの階段横には、毎年沢山のカラス瓜が生っていたが、それも今年はずつをみんな刈り取られて、ひとつも目にすることが出来なかった。せめても日吉のいちょうの樹だけは、たびたび枝を切り取られてしまうにもかかわらず、この秋も沢山のぎんなんをばら撒いていた。